

PROLOGUE

“Haemophilia” 日本語版創刊号によせて

吉岡 章

奈良県立医科大学
小児科



ヘモフィリアの医学・医療に携わっておられる皆様へ国際医学専門誌“Haemophilia”の日本語版をお届けします。“Haemophilia”は1995年にthe World Federation of Hemophilia (WFH: WHOの下部機関)の公式学術ジャーナルとして創刊されました。英国Royal Free HospitalのDr. Christine A. Leeと米国New England Hemophilia Center, WorcesterのDr. Doreen B. Brettlerをeditorに世界中の血友病および凝固学関係の専門家約40名をeditorial boardとしてOxfordのBlackwell Scienceから刊行されています。初めはquarterlyでしたが1998年からはbimonthlyとなっています。この他血友病関係の国際学会やシンポジウムの特集号を年1~3冊のsupplementとして刊行しています。この中には2年に1回開催されますWFH会議・学会のabstractsやplenary lectureの特集号も含まれています。

発刊以来順調に発展し、その内容、すなわちreview article, original paper, case report等はいずれもup-to-date, かつhigh standardなもので、我が国からの投稿も次第に増えつつあります。そして、とうとう発刊3年目にしてimpact factorが0.971となりました。これは、単一遺伝子疾患を対象とした専門誌としては極めて異例の快挙であり、世界中の出版社と医学関係者が驚き高く評価しているところであります。昨年この“Haemophilia”誌の日本語版を発行してみないかとの提案をC. LeeとC. Kessler(1998年, Brettlerから交代)の2人のchief editorから受けておりました。そこで、まず、我が国の血友病専門医の先生方にご相談申し上げましたところ、大賛成との力強いご賛同をいただきました。また、日本語版発行に必要な財政的支援はバクスター株式会社が快く引き受けていただくことになりました。

血友病の医学・医療を取り巻く諸々の環境は幅広く、かつ奥行き深いものです。近代的な血友病の概念の確立と治療法の普及は患者さんとその家族に大きな福音をもたらしましたが、一方ではHIV感染という極めて深刻な苦難をもたらしました。この不幸な歴史に我々は心からの反省と謝罪をしつつ、同時に血友病の未来を志向して参らねばなりません。そのためには国内のみならず血友病に関係する全世界の英智を求め資源を集めてたえず過去と現在、そして未来にアンテナをはりめぐらしておくことが必要と思います。“Haemophilia”誌日本語版は必ずやそのアンテナの役割を果たしてくれると確信します。多忙な先生方にコンパクトな情報をご提供させていただき、さらに興味のあるものはoriginal paperを、また他の専門誌にアクセスしていただければよいのです。また、平素専門誌にふれる機会の少ないコメディカルの先生方にも手軽にお読みいただけるのではと考えています。

創刊号は1998年に刊行されました4巻第1~6号のなかから、嶋 緑倫編集委員が責任編集を致しました。今後2冊を発行し、各編集委員が責任者となって、review articleは原則として全翻訳、その他の論文からは興味あるものを中心に可能な限り多くを抄訳としてお届け致します。この他WFHに関する情報を中心に血友病に関する学会や学術情報も掲載して参ります。今回はWFHの入会申し込みを綴じ込みました。さらに多くの日本人会員の入会を期待しております。